

図書館だより

準備3号 1998年

3月20日(卒業記念号)



良寛の書 — 外国人の視点から

編集・発行 敬和学園大学図書館

最近、本学のゴールドSTEIN、北嶋藤郷両教授が、加藤信一『良寛遺墨の精粹』（新潟・考古堂）の刊行に協力された。英文タイトル Ryokan's Calligraphy が併記され本文も英和両文となっているほか、詳細な英文用語集が付されたこの「国際版」の英訳部分を担当されたのである。ゴールドSTEIN教授に、外国人から見て良寛の書のどこが魅力的なのか、うかがった。

サンフォード・ゴールドSTEIN

良寛の書について、エッセイを書くように依頼されましたが、外国人の私には大変難しいことです。実際に、良寛の名筆といわれる遺墨50点を解説した加藤信一教授の書『良寛遺墨の精粹』を同僚の北嶋藤郷教授と共に翻訳しました。これは私の実に初めての書道の研究といえます。

とはいえ、私は過去に書道に関して、特筆すべき鮮烈な体験をもっています。私がパーデュー大学で教鞭を執っていた時、ひとりの禅師が、一年ずつ別々に二回、インディアナ州の私の家に下宿したのです。私はこの禅師ほど多彩な人物に、今まで邂逅したことがありません。一度、私は彼の Rilke の詩の講義を聴いたことがあります。彼は度々、私の妻の文化人類学のクラスで話しました。彼は日本の文化に関わる、いかなる主題でも話すことができました。彼は茶道の先生でしたし、勿論、禅の奥義を究めた人でした。彼は座禅を指導しましたし、座禅の修行のあと休息をとっている30人ほどのアメリカ人に対して、禅の講義を英語でしました。三週間のこのコースの期間中、週一度、彼は書道を私たちに教えました。確かに書道をマスターするには、あまりにも僅かな時間に過ぎませんが、それでも、硯の上で墨をする動作や、筆を持つ感触は印象深いものでありました。

勿論、この禅師は「無」について話してくれま

した。ある日、彼は書道に使う和紙がなくなると、パーデュー大学のトイレのペーパー・ハンドタオルを何枚か集めて来ました。この紙は重く、茶色で、目のあらいものでした。この紙の上に禅師は、漆黒の力強い漢字「無」を書いたのです。私はこのようなパワフルな書を今までにみたことがありません。その訳は、便所のハンドタオルに書かれたこの書を、個人的に私が頂いたので、特にそのような感慨を抱くからでしょうか？しかも、黒い墨の大きな文字の筆法、語自体、紙面の使い方に、私は書道の力強さを感じました。良寛の書を初めて学んで、良寛の書に纏わる逸話に、私は最も深い感銘を受けました。手書きの日本語を読む、私の能力は限られておりますので、私は書を良寛の生活と結びつけてみてしまいます。和紙の上を次々と零れ出るような、書の漢字の流れをみる外国人は、その小滝の中に理解力を失ってしまうでしょう。このことは、日本人とても同じことがいえるでしょう。文字の数が少なければ少ないほど、それだけ印象は大きいのです。良寛の「天上大風」、「心月輪」、「一二三」、「いろは」が有名なのは、この理由によるものではないでしょうか？これらの書の傑作には、良寛の有名な逸話が、合わせ鏡のように付随しています。良寛が托鉢していると、ひとりの少年が風文字を書いてくれ

と頼んだとか、解良家の庭の地面に落ちていた鍋蓋とか、無学な者でも読めるような字を書いてくれ、と農夫に懇願されたとか。

最近、私は、良寛の文字はまるでサインペンで書かれたように思えます、という趣旨の手紙をある日本人の友人から受取りました。私の友人のコメントは、良寛自身筆や紙が不足していたことを私に想起させてくれました。幸いにも彼の擁護者たちは、彼に必需品を贈りましたが、それでも筆が擦り切れ、チビり、紙不足のことがしばしばあったに違いありません。『大愚・良寛禅師』の中で、良寛の友人で伝記作家の鈴木文台が、ある日良寛を訪ねてみると、彼の机上には、「何本かの擦り切れた筆と五～六十枚の紙がのっていたが、どの紙も殆ど真っ黒になるほどに書が重ね書きされてあった」という逸話を披露しています。(Great Fool: Zen Master Ryokan, by Ryuichi Abe & Peter Haskel, University of Hawaii Press, 1996)

たしかに良寛の書は「軽み」「細み」で知られております。良寛は他人の書を研究しましたが、独学で独自の良寛調の書を確立しました。歌人が殆ど無意識に、和歌を詠むように、良寛は漢字やかなの書を数多く残しました。彼はよく人々から、作品を書いて欲しいと求められました。時には、自ら進んで頼みに応じたこともありましたが、要求されるのは、基本的には気の進まないものでした。良寛の漢詩に次のようなものがあります。

剃除髭髪為僧伽 髭髪を剃除して 僧伽となり
撥草瞻風有年 撥草瞻風 ここに年あり。
如今到处供紙筆 如今到るところ紙筆を供して
只道書歌兼書詩 ただ道う歌を書けまた詩を書けと。

(頭をまるめて僧侶となり、きょうまで修行行脚しあるいて幾年かを経た。そんな自分に当今はどこへ行っても紙を与え筆を持たせて、ただ

歌を書けの書を書けのと人は要求する。)

外国人はいつも書道の、筆法や動き、白黒のコントラストと陰影、語の配置などに魅了されるであろう、と私は信じます。少なくとも、漢字の字数の少ない作品の単純な意味は把握することが可能であります。しかし、より長い作品になりますと、複雑な日本の難解な美学の摩訶不思議なものの一部となってしまうことでしょう。(北嶋藤郷訳)

師弟往復書簡

旅立ちの日、「出会い」を思う

茂木陽子(敬和ジャーナル倶楽部部長)から片桐邦郎教授(同倶楽部顧問)へ

拝啓 残寒の候、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。先生はいつもお元気そうなので、逆に心配してしまいます。くれぐれもご自愛ください。ここにお願ひしておきます。

早いもので先生と初めてお会いしてから四年が経ちます。本当に私にとっていろんな意味で充実した四年間でした。先生と初めてお会いしたのは、本当に偶然といえば偶然でした。忘れもしないあの出来事。先生、覚えていらっしゃいますか。

一回生時代、まだ何回目かのチャペルアッセンブリーアワーの時間、ある先生が小千谷出身の詩人西脇順三郎の朗読テープを流しました。私はその朗読テープに感銘を受け、さっそくそのテープを借りた訳です。そしてそれを返す時に、まだ入学したてのせいもあっていったいどの先生に返せばいいかわからなくなり、半ば直感で(先生ごめんなさい!)片桐先生のポストに入れてしまい、後日先生に呼び出されることになったのです。そしてこれもまた偶然ですが、先生が大学時代西脇順三郎に習ったことがおありになるということを知りました。先生これが縁というものでしょうか? だとしたら先生との出会いは、私のはやとちりが生んだ偉大な縁

でした。編入を考えたあの時、その代りにフランス語を毎週教えて頂いたあの日々、どれも私にとって忘れることはできない貴重な人生の財産です。

敬和ジャーナル倶楽部も引き継ぎがなく、昨年の第五号をもってやむなく休刊になります。私の実力不足で先生には申し訳なく思っておりますが、反面これでいいとも思っています。むしろ、この無気力無責任な時代において、中途半端な義務感からではなくしっかりとした意識を持った学生が、また敬和ジャーナルを続行してくれることを祈ります。私の甘さや身勝手さで先生に多大な迷惑をおかけしましたことをどうかお許し下さい。きっとこれからもご迷惑をおかけすると思います。どうか見捨てずにご指導下さい。

片桐先生は私にとって生まれて初めて出会った教師でした。少しはお年を考えて(怒りますか?)くれぐれも無理なさらぬように重ねて私からお願いします。

追伸 フォアグラを食べに連れて行って下さるというお約束、先生覚えていらっしゃいますか? 楽しみにしています。 かしこ

片桐教授から茂木陽子へ

お手紙有難う。あなたはもうすぐ社会人になるのですから、「拝復…」と堅苦しい書き出しにしようと思ったのですが、いつものように「ご卒業、おめでとう。」と、私のいまの気持ちを普段のように素直にお伝えします。

あなたのお手紙にあるように、私も人生での「出会い」とは大切なものだと考えています。人生にはいくつもの出会いがあるのですが、それに気が付かないで別れになっていることがはるかに多いのです。

新設校の敬和学園大学に赴任してから、私には多くの人との出会いがありました。前任校とは異なった学生諸君との幾つかの出会い。それは、学科の区別なく、いろいろとありました。

英語英米文学科の卒業生の結婚式によばれたこともあったし、日本語の教育法を教えたこともありました。来る学生は、やる気があるのですから敬和の学生としては同じ事でした。あなたとの出会いもメール・ボックスを間違えたあなたの「そそっかしさ」が始まりでしたね。

私が卒業した慶應義塾大学での西脇順三郎先生との出会いは大学二年の時でした。それから大学院を修了するまでの数年間、私は単位を履修した後も講義には出ていました。単位にならない講義は指導教授だった佐藤朔先生、折口信夫先生、青柳瑞穂先生など何人もあります。あなたと同じように私も自分の学生生活は充実していたと確信を持って言えます。これは幸せなことです。

いま社会人になるあなたに饒(はなむけ)の言葉を送ります。今までのあなたの人生は順調だったと思いますが、社会人になったら時には挫折感を意識することもあるかと思えます。以前、あなたに「誤算の論理」という本の話をしたのを憶えていますか? 学生の中には負け犬の意識を持っている者がいますが、もっと胸を張って何にでも好奇心を持って、生きていって欲しいのです。

新聞部のことで印刷の会社に行き、帰りに部員たちと食事をして、フォアグラの話をしました。卒業式の後で皆にご馳走します。ご卒業おめでとう。

児島 襄 『誤算の論理』(文藝春秋) 1987

戯評：ケンポウのはなし

小野 哲

煽動(センドウ)されるひとは善良(ゼンリョウ)である。善良をセンドウして当選すると選良(センリョウ)。センリョウ下につくられた憲法が日本国憲法で、10年もまえ、あなたがたが小学生の時代はまだケンポウヨウゴとかアンポンタンの行列の気配は、まだ薄くのこって

たかどうか。

あなた方も敬和の若手の先生方も、憲法といえば日本国憲法で私ぐらいの年よりは大日本帝国憲法のほうが風格がよかったと思っているが、メッタにそれは口にしない。センドウされて旧弊（キュウヘイ）とののしられるのがいやだから。それで、もっとまえの千年も前の十七条憲法のほうがさらに風格があったとってお茶をにごす。

お茶は勿論ウーロン茶などではなくレッキとした宇治茶がいい。ふつうの緑茶もわるくないが、やはり宇治茶がいいがメッタに手に入らない、量が少いからだ。和光同塵といって呑む。

量といえば風格の憲法は 17 条で武家・公家の式目（憲法のようなもの）は 17×3 の 51 条で、明治憲法は 76 条で日本国憲法は 103 条である。この場合、条文が多い方がダメで憲法のメーカーをくらべると風格の由来が歴然とする。聖徳太子、伊藤博文とマックアーサの順になる。残念だからと日本の政治に風格を期待して憲法改正から手をつけるのはモハヤ迂遠である。とりあえずは行革と日露平和条約と竜太郎はイキゴンでいるが、みててゴラン樺太石油開発の話にすりかえられるから。

そんなことよりは、取りあえずは国際政治の風格を願ってCO2制御の可能な、しかし先サキを急がないといけない数量に、世界諸邦をまとめる数量に持ちこむことである。

京都会議に失敗するようでは日本の風格はその環境以下である。台湾を西欧人は美麗島といったがジバングはむかしからすばらしい環境の邦なのだ。やまとしまねは。いやどうも。

（11月14日記 本学教員）

図書館を育ててくれた君たちへ

卒業式が近づくと、私の前を通り過ぎていった卒業生達を思い出します。

まずは1期生。ほとんど全員の名前と顔を覚え、特によく図書館を利用してくれた学生に至っては彼(彼女)達がどのゼミに所属しているかも覚ええました。

しかし本号の題字デザインをしてくれた吉越君が、このような才能の持ち主であるとは知りませんでした。これを生かせる仕事に就けるといいネ!

次に図書館でアルバイトをしてくれた人達、特に3期生の8人は、当時、機械化の作業をするために一緒に奮闘してくれました。3年経った今でも一番充実した時として鮮明に思い出します。その中の1人は昨年末、仕事でドイツに赴任することになったそうです。がんばって!

今回卒業する学生も含め、アルバイトをしてくれる学生はいつも図書館の良き理解者です。「利用者として、この図書館に要望することがあれば教えて」と訊くと、「今のまま続けてくれればいいよ」と言ってくれます。思いやりをありがとう。

卒業式当日、顔なじみの卒業生達が、「お世話になりました」とお礼を言ってくれます。お世話になっているのは、本当のところ私達図書館員の方かも知れません。図書館員は利用者である学生諸君に育てられているのですから。

第4回の卒業生諸君、これから困難なことが多いと思います。でも、自分の人生は自分の手で切り拓いて下さい。卒業おめでとう。

<番外編>

本学の職員の中に第1期・3期の卒業生がいます。今でも2人が在学中、図書館を利用していた光景が眼に浮かびます。

ある日の私と彼らの会話。「大学はたくさんあるけど敬和が一番!」「本当?うれしい!」

卒業生全員がそう思ってくれますように...

(図書館 松原)

事務室の窓から

今年も卒業式を迎える時期になった。本学としてはまだ4回目に過ぎないが、卒業生諸君の前途を祝福する気持ちの深さに変わりはない。否、期待するものはむしろ大きい。

本号は、卒業記念号を名のるにはおこがましいが、図書館員の思い出話のほかに、ひとつだけその企画がある。在学中敬和ジャーナル倶楽部の部長として活動し今回卒業する茂木陽子さんに、同部を指導された片桐先生との間で、大学生活における「出会い」をめぐって手紙の交換をしてもらったのがそれである。出版社勤務に入るという彼女の場合は、在学中の文化活動が進路に結びついた幸せなケースであり、活躍が期待される。

ゴールドスティン先生には、良寛の書を世界の人が味わえる舞台を、北嶋先生とともにしつらえるという仕事の意味を語っていただいた。もっとも民族的なものが普遍的たりうるか、日本人として興味深いものがある。

小野先生の「戯評」は、地球温暖化防止京都会議を前にした昨年11月に書いていただいたのに、企画の変更で今号に持ち越してしまった。筆者と読者に深くお詫びします。敗戦後の大きな変革が挟まったため、戦後世代は過去の理解において一面的になりがちである。戦前・戦中を生きた同時代者の発言にまず虚心に耳を傾けることが重要だと思われる。

お気づきのように、本誌題字デザインが一新された。前号までの泥臭さを見かねた本学卒業生(1995年度)の吉越正行君が考案してくれたものの一つである。卒業生にわれわれの力不足を支えていただくのは大きなよろこびである。

実はこれでも決まりというわけではなく、もう少し試行をつづけていくつもりである。これに限らず、感想・提案をお寄せいただければ幸いである。卒業生諸君にもそれをお願いしておく。

(As)